

## 武蔵野日曜聖書講筵

## 狭き門

## ――ルカ伝第13章22～30節――

1977年9月4日

小池辰雄

門に体当たり 十字架のキリストという狭き門 大道無門 今ここにおいて入らなくては 天  
門 キリストの中へと入れられる 生命賭けで私の中に入ってこなかったやつは知らんよ 天  
国入りの路

## 【ルカ13・22～30】

22 イエス教えつつ町々村々を過ぎて、エルサレムに旅し給うとき、<sup>あるひと</sup>23 或人い  
う『主よ、救わるる者は少なきか』<sup>あるじ</sup>24 イエス人々に言いたもう『力を尽くし  
て狭き門より入れ。我なんじらに告ぐ、入らん事を求めて入り能わぬ者お  
からん。<sup>いえあるじ</sup>25 家主おきて門を閉じたる後、なんじら外に立ちて「主よ我らに開  
き給え」と言いつつ門を叩き始めんに、主人こたえて「われ汝らが何処の者  
なるかを知らず」と言わん。<sup>あるじ</sup>26 その時「われらは御前にて飲食し、なんじは  
我らの町の大路にて教え給えり」と言い出でんに、<sup>い</sup>27 主人こたえて「われ汝  
らが何処の者なるかを知らず、悪をなす者どもよ、皆われを離れ去れ」と言  
わん。<sup>いずこ</sup>28 汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者の、神の国に居り、<sup>すべ</sup>  
己らの逐い出さるるを見ば、其処にて哀哭・切齒する事あらん。<sup>そこ</sup>29 また人々、<sup>はがみ</sup>  
東より西より南より北より来りて、神の国の宴に就くべし。<sup>きた</sup>30 視よ、後なる  
者の先になり、先なる者の後になる事あらん』

## ●門に体当たり

今日は「狭き門」ということで、ルカ伝13章22節から。マタイ伝では、ちらほらしていて、  
ルカ伝の方がまとまっているわけです。マタイ伝の7章、25章のところをまとめると、ル  
カ伝の13章になるわけです。ルカ伝だけで結構です。

## 22 イエス教えつつ町々村々を過ぎて、

イエスは語りながら町々村々を過ぎて、

## エルサレムに旅し給うとき、

これはルカ伝9章51節から19章27節までがエルサレムへの旅です。そのエルサレムの旅を  
非常に詳しく書いているのがこのルカ伝なんです。ルカというのは旅行記述者みたいで――



―使徒行伝がそうですから―非常に文学的にも優れています。

<sup>23</sup>或人<sup>あるひと</sup>いう『主よ、救われる者は少なきか』

救われる者は少ないでしょうかと。

<sup>24</sup>イエス人々に言いたもう『力を尽くして狭き門より入れ。我なんじらに告ぐ、入らん事を求めて入り能わぬ者おからん。<sup>25</sup>家主<sup>いえあるじ</sup>おきて門を閉じたる後、なんじら外に立ちて「主よ我らに開き給え」と言いつつ門を叩き始めんに、主人<sup>あるじ</sup>こたえて「われ汝ら<sup>いすこ</sup>が何処の者なるかを知らず」と言わん。<sup>26</sup>その時「われらは御前<sup>のみくい</sup>にて飲食し、なんじは我らの町の大路<sup>おおじ</sup>にて教え給えり」と言いでんに、<sup>27</sup>主人こたえて「われ汝ら<sup>いすこ</sup>が何処の者なるかを知らず、悪をなす者どもよ、皆われを離れ去れ」と言わん。

なかなか、キリストの言葉は強いですね。

<sup>28</sup>汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及<sup>すべ</sup>び凡ての預言者の、神の国に居り、己らの逐い出さるるを見ば、其<sup>そこ</sup>処にて哀哭・切齒<sup>なげき</sup>する事あらん。<sup>29</sup>また人々、東より西より南より北より来<sup>きた</sup>りて、神の国の宴に就<sup>つ</sup>くべし。<sup>30</sup>視よ、後なる者の先になり、先なる者の後になる事あらん』

素晴らしい言葉ですね。これはぜひ、今日はしっかり学んでいただきたい。

「力を尽くして狭き門より入れ」

と。これは極めて大事な言葉のひとつです。大事な言葉は大体、簡単です。

「力を尽くして」

というのは、全身全力です。「尽くす」んですから、余すところがないんです。「尽くして」という日本語は素晴らしい。「尽力」という言葉がありますね。力を尽くす。

「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、主たる汝の神を愛すべし」

というキリストの言葉があります。一切をあげて、全存在をもって、狭き門より入る。要するに、体<sup>たい</sup>当たりです。「体」というのはただ「からだ」のことではない。全<sup>けん</sup>存在<sup>そんざい</sup>です。

「体当たりせよ」

ということですよ。

「体当たりをもって、狭き門から入れ」

と。門は狭い。狭いから何も持つていくわけにいかない。身体<sup>からだ</sup>そのもの。無一物。無一物的全存在。それが「力を尽くして」ということです。

「自分はまだ力が少し足りないから、少し訓練してから力を尽くそう」

なんて、そうじゃない。あるがままの自分をそのまま体当たりの投<sup>な</sup>げ入<sup>い</sup>れること。投<sup>な</sup>身<sup>み</sup>、なげみ、捨<sup>す</sup>身<sup>み</sup>ということ。

「捨身の態勢で、投身の態勢で門にぶつかっていけ」



ということです。

### 「門を叩け、さらば開かれん」

とキリストが言われた（マタイ伝7章）。狭き門から入るんだから、「入門」するんだ。あなた方はこの集会に入門している方々です。入門というのは素晴らしい言葉だ。弟子のことを門弟という。門人という。漢字というのはいいね。私は漢字の熟語が大好きだ。どしどし使う。門弟、門人、門下生。皆さんは、そういう言葉をむしろ使った方がいい。

### 「キリストの弟子」

という言葉があるが、「弟子」というよりも、「門弟」の方がいいな。門下生です。

そういう門に体当たりする。「狭き門」というのは、私がいつも言っているとおり、十字架という門です。キリストという門です。

### ●十字架のキリストという狭き門

なるほど今は、日本の試験地獄はみなこれは「狭き門」だ。

「だから、今の日本の受験体制はキリストの言葉にあっているからいい」

なんて思っていないか。これは困る。方々でそんな狭き門で、非常にマイナスが多い。そういうことを言っているのではないですよ、この「狭き門」というのは。現実には、学生諸君は、なかなか狭き門で大変だ。いわゆる「狭き門」という言葉はここからきているんだけれども。

### 「富める者の天国に入るは、ラクダが針の穴を通る方がやさしい」

なんてキリストが言われた。申し上げているとおり、

### 「針の穴」

というのは、

### 「針の穴という名前の狭き門」

だった。そこをラクダが通る方がまだやさしいという。あれも、「針の穴」は「狭き門」のひとつの例なんだ。いわゆる針の穴ではないですよ。

ところが、ありがたいことには、キリストという狭き門なんです。註解者がそこまではつきり言わない。註解書をみても、

### 「キリストという狭き門」

とはどこにも書いてない。これは私が今言うところのもので、キリストという狭き門は、もつとはつきり言うとは、十字架のキリストという狭き門です。

本当は、キリストという狭き門は誰でもが入れられます。「いかに少ないか」ではない。キリストはここまではそこまで、

### 「これは私のことだよ」

と仰っていないけれども、私ははつきりそうとる。



「入らん事を求めて入り能わぬ者おおからん」

多いだろうと。これは事実、多いんだよね。けれども、もうひとつキリストの言葉の奥をさぐると、

「誰でもが入れらんだよ」

ということです。ところが、誰でも入れるということが、実は難しいんです。妙なものだね、これは。誰にでもできることがむずかしいという。ということは、難しくしているのは、こっちはなしだ。キリストの側からいうと、もう何でもない。

「我（キリスト）、門の外にて叩く。開け。お前の心の門を開け」

という。心の門を、心門を閉じているから、魂の門を閉じているから、それでは入れない。実は、キリストが入ろうとしている。

「狭き門より入れ」

ということを、もうひとつ別な角度からいうと、

「私はお前の中に入ろうとしている。なぜ、門を閉じるか。理屈を考えたり、自分がどうであるかであるなんていうことを考えたり、そんなことはひとつも要らん。相対的な判断はひとつも要らん。私は無条件にお前の中に入っていこうとしているのに、なぜ、条件付けをやっているか」

と。黙示録3章のあの言葉、

「私は戸の外で叩いているから、開けよ。私は入って行って、お前と一緒にご

馳走を食いたいと思っている」

と。楽しいひとですよ、キリストというのは。よく、ご馳走のことがでてくる。イエスは、ケチ臭いひとではないんですよ。

「食を貪る者、酒を好む者」

なんて言われた。真似してはいかんですけども。キリストは酒に吞まれないんです。ソクラテスもそうだ。だから、

「俺もひとつ酒を飲む訓練をしよう」

なんて、そんなことは要らんですよ。

「儀文は殺し、霊は活かす」

というが、そういう気合が大事なんです。

「門」はキリストでもあり、自分でもあった。門扉、扉に全存在をもってキリストの十字架にぶつかる。ぶつ倒れる。

そういう意味で、

「力を尽くして狭き門より入れ」

という。もう、これを聞いただけでも、力が来ちゃうです。全存在をもってキリストという門の中に入るのだから、誰でもが入れられます。無条件に入れる門なんです、この「狭





き門」は。

「狭い門だから、これは大変だな」

なんて思っではないかん。「狭い門」ということは、

「何も携えないで、無条件に、単身そのまま裸で入って来い、体当たりしろ」

ということですよ。

実はもう、門は開かれていた。十字架という門は開かれていたことに気がつくだけの話なんだ。

「体当たりしてみたら、門は開かれていました」

なんていうことです。

「体当たりして開かれる」

ということと、

「体当たりしてみたら、もう開かれていた」

という、この矛盾的な表現に本当の世界がある。本当の真理の世界は単なる平面論理ではないですから。分かりますか。

## ●大道無門

ここにちょうど、「大道無門」と書いてある。

「大道無門」

千差路有

透得此関

乾坤独歩

「大道無門、千差路有<sup>みち</sup>。此の関を透得すれば乾坤独歩<sup>けんこん</sup>す」

という。

「力を尽くして狭き門より入れ」

というのは、入れるんです。全存在をもつてぶつかれば、キリストは無条件に入れてくださる。分かりましたね。十字架という門は、一切を贖っている。

「過去も現在も未来も、何も心配は要らんぞ。今、この現実において、今ここにおいて、その中に入れ」

と。そうしたらば、永遠の現実に入ってしまうんです。

こういうような気合は――今朝、NHKテレビの宗教の時間で仏教の話をしていたが――いわゆる仏教の「縁起」なんていう悟りの世界とは違う。活ける靈法の世界だから。私はあれを聞いていて、仏教の人は気の毒だなと思った。大変だ、あれは。まあ、あんまり大変だもんだから、法然や親鸞はもう

「南無阿弥陀仏」



になってしまった。あれはいいよ。福音は実に簡単で、しかしながら、その中に入ると、無限無量なものが展開を始めるから。行き詰まったっていいじゃないですか。行き詰まるもの凄いいことになるんです。いいですね。

24 イエス人々に言いたもう『力を尽くして狭き門より入れ。我なんじらに告ぐ、入らん事を求めて入り能わぬ者おおからん。』

「だけれども、実は誰でも入れるよ」

とまでは、キリストは言わないんだ。ダメだね、キリストは――「ダメだ」なんてキリストのことを言っているはいかん。ひどいね、私は――イエス・キリストは本当は、

「私に來なさい。私という門に來なさい。誰でも入れてやる。なぜ、尻込みしているか」

と言う。それが本当の祈りなんです。そういう態勢で入っていくことが祈りなんです。自分自身を祈り入れる。祈り入るんです。まあ、青年諸君がこういう世界に今から入ったら、えらいことになるよ。

● 今ここにおいて入らなくては

25 家主<sup>いえあるじ</sup>おきて門を閉じたる後、なんじら外に立ちて「主よ我らに開き給え」

と言いつつ門を叩き始めんに、主人<sup>あるじ</sup>こたえて「われ汝ら<sup>いずこ</sup>が何処の者なるかを

知らず」と言わん。

「家主<sup>いえあるじ</sup>」というのは、神・キリストのことです。これは具体的にはキリストだよ。

「私がおきて門を閉じた後、お前たちは外で、「主さま、私たちに開いてください」

と言いつつ門を叩き始めん。もう遅いよ、その時に叩いたって。門が閉じてしま

つてから叩いたってダメだよ」

と。

「まあ、仕方がない。明日くらいに、信じましょう」

なんていう人は、門が閉じてしまつて、明日はダメだよ、入れない。今日、今ここにおいて入らなくては。

宗教の世界は即刻の世界です。即の世界です。「信ずる」とは、直ちに行動する世界です。

「信は行なり」

と言ったのは、そのことなんです。

「信仰によつて義とされる」

と言うけれども、「しんこう」は、信、即行の「信行」だ。「信ずる」とは、全存在をもつてその中に入ることが「信ずる」ということ。全存在をもつて受けとることが「信ずる」ということ。それは内的行為、一番根源的な行為なんです。いわゆる心理的なものではない。全存在なんだから。心ではないんだから。もう、私はこんなことを言っていると、異言が



出そうで困るんだよ。

なぜ、私にこんなに力が来るんでしょうね。それは上から、語っているうちにやってくるから仕方がない。あなた方も、聞きながら、その中に入っているかね。頭で聞いているだけではダメだよ。

もうとにかく、いろいろね、人間は相対的な問題や課題があるでしょう。そんなものはこの日曜日の集会の世界では突き抜けないと。そうしたら今度は、現実突き抜けることができるでしょう。何のための集会か。私は決してお説教なんかしているのではない。あなた方も、聖書の研究なんかしているんじゃない。研究なんかやったって、何年やっただって入れはしない。ギリシア語やヘブライ語を勉強したっていいよ。けれども、そんなものが鼻にかかっているうちはダメです。

「私は日本語だけでいくよ」

と。いいよ、それで。そのかわり、その背後の世界、根源語が読めれば、ギリシア語やヘブライ語ができるよりかはるかに素晴らしいことになる。こんなことを言うやつがあるのかね、他に。ギリシア語やヘブライ語ができる人はそういうことが言えない。私だって、ヘブライ語の皮きりの男だけれどもさ。ヘブライ語を3年間、若い人たちに教えた。無教会時代に私が皮きりをやったんですよ。けれども、そんなことでどうのこうのではないんです。

『主よ、我らに開き給え』と言って門を叩いても、私はお前たちがどこから来たかを知らない」

なんて、そらつとぼけたことを言っている、キリストは。

「どこから来たか知らんよ」

なんて。愉快だね、キリストの言葉は。イエスというひとは、何か整った人かと思ったら、そうではなかった。

「俺は知らんぞ」

と言う。顔を見れば分かるんだけど、それでも「知らんぞ」なんて。

「求むべき時に求めず、聞くべき時に聞かないから、もう門を閉じた後から来たってダメなんだ。天国行きはお断りだ、地獄行きだ」

ということですよ。

『明日、明日。今日ばかりではない』と、すべての怠け者は言っている」

というドイツ語の諺がある。これは何も勉強のことにかぎらない。天国の世界も正にそうなんだ。毎回、毎日、今、ここに、という世界。信仰は、

「今直ちに」

という世界です。条件が付くなら、「今直ちに」はできないよ。

「もう少し聖書を読んでから、もう少し人を愛してから」



とか、そうじゃない。人間の側の相対的な善悪なんてことではない。環境の良し悪しということでもないんだ。いいですね、その気合が分かったですか。

## ●天門

そうしたら、

<sup>26</sup>その時「われらは御前にて<sup>のめぐい</sup>飲食し、なんじは我らの町<sup>のおおじ</sup>の大路にて教え給えり」と言い出でんに、

「あなたの前で一緒にご飯を食べたり、コーラを飲んだりしました。辻説法していらつしやるのをうけたまわりました」

と。いくら近くにいても、いくら同じ釜の飯を食べても、いくらただ説教を聞いても、それは何も本当に受けとつていないではないかと。

キリストの直弟子たちが実はそれだったんです。全然そうだとは言いい切れないくもしれませんが、とにかく、彼らはペテロもヨハネもヤコブも一番キリストの直々の弟子だよ。門弟なんだ。だからいいかと思つたら、みんなキリストに躓いてしまつて、散りになってしまった。けれども、キリストは彼らを選びましたから、

「祈つて待つていろ。私は十字架にかかつてから、昇天してから、お前たちのところへやつてくる。聖霊をもつてやつて来るから。そうしたら、私が言つたりしたりしたことが本当につかめるぞ。それまでは、つかんだような顔しているけれども、ダメだぞ」

と。これが、申し上げているとおり、

「十字架と聖霊は離すことができない」

ということ。十字架という狭き門なんだ。

「大道無門」というね。キリストは天下の大道です。

「我は道なり、生命なり、真理なり」

という。「真理」とは、これは頭の真理ではないですよ。真理というのは必ず実現するところの真なるもの。これが真理です。真理という言葉が躓きになる。「道」は、いつも申し上げているとおり、日本人が本当は持つていた世界なんです。茶道、弓道、剣道、柔道、書道、画道。道なんだ。

キリストは天下の大道なんです。そこには門がない。世にはカトリックの門、プロテスタントの何々宗派の門、無教会の門がある。無教会は本当は無門だよ。けれども、その無門にまで徹しないから困つたな。「無教会主義」なんて言うから。内村鑑三先生は本当はそんな人ではなかったんだ。内村先生の精神がだいぶ歪められてしまった。内村鑑三は聖霊の世界が火花していた。

「それを常燃の火に、お前たちは燃やせ」





とまで、先生は仰らなかつたけれども、そこをやらなくてはいけないんだ。

大道。どうですか、あの旧約聖書のヤコブ。ヤコブがお嫁さん探しに出かけていった。その途中で石を枕にして寝たら、夢をみて、天から梯子がかかっていた。ここが天の門であつた。天門であつたという。地上には何も門がない。けれども、そこに天門が開けていた。至るところこれ天門あり。無門であるからこそ、至るところに門があるんです。

「原始福音」とか、やれ何とか「幕屋」とか――私が一番先に「幕屋」と言つたんだけど、だから、「武蔵野幕屋」という歴史的な名前は今でも使いますけれども――「召団」と言おうが、「エクレシア」と言おうが、どうだつていいです、そんなことは。私は名前なんかにこだわつてない。

これは老子と同じで、無名の世界です。「名無き名」という。あまり、私がケタはずれなことを言うものだから、あなた方は目を丸くするかもしれないけれども。

そういう天門です。至るところ門。だから、大道無門。キリストという狭き門は、実は至るところでもつてこれに入れるところの、誰でもが入れるところの、無条件に入れる門である。いわゆる

「どこの集会でなければならぬ」

なんていうような門ではない。その点では、無門である。無門の真門というんだ。無門が本当の門だ。「真門」なんて、今私は初めてここで使う――こんな言葉は使わなくていいですよ――要するに、キリストという門ということははつきりおぼえてください。

### ●キリストの中へと入れられる

そして、十字架のキリストという門に入ると、そこは活けるキリストの世界に入る。活けるキリストは即ち、聖霊の御霊のキリストである。これは、

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。キリストわがうちに在りて生き給うなり」

という世界と同じことです。

さっきの「縁起」の話で、死の話もしてたよ、なんか情けないような話を。死を、ある意味において「悟り」で乗り越えるような話だけれども。

「われキリストと共に十字架せられたり」

と、パウロが言つたときにはもう、

「私はもう死んでいる者だよ。律法も罪もサタンも陰府も、これには私は関わりない世界に入ってしまったている」

という。これを「死者」と言おうが、「無者」と言おうがいい。無き者です。

「無者」

というのは本当に



「私の無い」

という意味と、もう一つは、

「無き者」

というような意味でいうと、非常に逆説的な言い方をすれば、それが本当に在るものなんだ。白隠のおもしろい歌がある。

「若い衆や死ぬがいやなら今死にやれ ひとたび死ねばもう死なぬぞや」

「若い衆や、やがて死ぬのが嫌なら今死んだらよかろう。一度死んだらもう死なないよ」

と。白隠のこの言葉はガラテヤ書2章20節と同じなんです。

「キリストと共に十字架されてしまつて、私はもうこの世には死んだものです。ところが、私は生きてます。もう死にません。『キリストわがうちに在りて生き給うなり』と、永遠の生命がわがうちに在りて生き給う。もう、相対的な死なんていうものはもはや乗り越えてしまいましたよ」

と。白隠の気魄はそこにあつた。それはひとつの禅的な悟りの気合でしようけれども、私たちの、もうキリストの十字架という絶対恩寵の世界であつて、死も永遠の生命もいわゆる悟りでなくて、実に最大の易行道です。易行道だけれども、この易行道が、逆説的にいうと、むしろかしい。問題は本当にそこに入っていないから。本当に受けとつていけばいい。

「本当に受けとる」

というのは努力ではないですよ。向こうが私たちに霊的な事実をもつて迫つて与えているから、ただそのことに気がつけば、豁然<sup>かつぜん</sup>としてその世界に入れる。気がつけばいい。努力ではないんです。気がつけばいい。目がさめれば。

「我が眼より鱗<sup>うろこ</sup>の如きもの落ちたり」

という。パウロはダマスコ途上で霊撃されたけれども、我々は霊撃されなくて済んでしまつてゐる。キリストは既に十字架でもつて道を備えている。

「はいっ」

と無条件に受けとる。無条件に「はい」と。その「はい」が本当に全存在的な「はい」になつてごらん。もうそうしたら、聖霊の世界に入つてしまふ。何かしらんが、もの凄い力の世界に入つてしまふ。それが御霊の世界だ。

「われ汝のうちに」

という。キリストは、

「私はお前のうちに入るよ。お前は、私が全部引き受けてしまつたんだから、入つてこいよ」

と。だから、パウロが

「われキリストの中に<sup>うち</sup>、キリストわが中に」



と言う。あの「の中に」という状態の前に、「エイス」「の中へ」と入る。中へとバプテスマする。

「中へと入る」

ことは、逆に言うと、

「中へと入れられる」

ことなんです。受け身でいい。

いいですね。それがその「狭き門」なんです。「狭き門」なんていう言葉が躓きになるから、困るけれども。実は、万人を迎えているところのキリストという門。そしたら、その先は広々とした世界である。廣大無辺の世界である。狭い世界ではないですよ。

●生命賭けで私の中に入ってこなかったやつは知らんよ

少し話をずらして、若い人たちに言うけれども、まあ、学校を出るまでは大変だよな、試験を通らなくては。けれども、私は学校でいつも

「天賦天職」

ということを言っているんだ。これを本当にみんな受けとっていないらしいね。

「ああ、あれは『この道を往く』という本に書いてある」

なんてなこととで、おしまいになっている。そして、棚にあげてゴミになっている。大体、わかっている。本当にあれをカバンにいれて、時々電車の中で読むような生徒がいるかいなか知らんよ。私は、一行一行を魂をこめて書いたんだけど。お父さんもお母さんもあまり読んでないようだし、もういい加減に学校をやめようかな(笑)。

天下から賜った才能がみんなあるんだ。手仕事が好きなのは大学なんか行かなくていいんだよ。手仕事人のところに弟子入りする。天から賜った素質が何でもその人にある。ドイツの青年はかなりこの自覚をもっています。だから、ギムナジウムを出ても、大学へ行くようにしないですよ。

「私は大学のコースではありません」

と。ドイツ人というのはそういう自覚のしっかりした国民です。アメリカの真似するよりか、やっぱりドイツを学んだ方がいいですよ、相対的な意味で。そういう賜った、その人でなければならぬことがあるんだよな。ナスはナス、キュウリはキュウリなんだ。ナスにカボチャになれと言ったってしょうがない。私に絵を書けと言ったってしょうがない。私に彫刻せよと言ったって、これはしょうがないんだ。

天賦、そこに天職がある。これは本当の意味において、「狭き門」なんです。自分の行くべき道は細い路、細路なんだ。隘路<sup>あいろ</sup>。みんな一人びとりにその人でなければ通れない隘路があるんだ。それは天路と言ったっていい。

「天路歷程」



なんていう言葉があるけれども。各々の足で歩く路。自分の天性はここにあるから、それにまつしぐらに、それを中心にして行けと。あの『この道を往く』の中に兼好法師の『徒然草』の第一八八段のところに私は引用しておいた。

「ある一つのことに打ち込め。その他のことを顧みるな。ひとに何と思われたって構やしないんだ」

と。あの兼好法師は愉快な男だよな。その通りです。いわゆる試験に及第しようが、及第しまいが、人生の本当の試験の勝利者となれと。大学なんか入らなくなつていいんだよ。今の大学は台無し学だからね。

D学校は医科系統が多くて困つたね。そうすると、友だちが医科だと、何だかしらないけれども自分も医科に行こうなんて、冗談じゃない。それぞれの特色をもつて行く。むしろ人の行かないようなところへ行きなさい。天文学でも何でも。

自分の隘路を切り開いていく。

「私はこれで自分の本質に本当に即した歩き方をするんだ」

と。どんな艱難でも、それは突破します。そして、それが知らないまに本当の意味で、社会に貢献することになる。本当にそうですから。人真似はいらん。三谷先生の

「汝自身たれ」

というあの文章は私は大好きだ。狭い意味で自分に執着する意味の「汝自身」ではないですよ。

「本当に天から賜つたその汝の本質に即して行け。それを磨きあげて鍛えて行け」

ということですよ。これが狭き路なんだ。ところが、それが実は、天下の大道に即する。大道即細路、細路即大道ということになる。

この花はこの花らしく咲いている。このリンドウはリンドウらしく咲いている。どっちも人真似していない。それで百花繚乱で素晴らしい。みんなバラだつたらしょうがない。

キリストの中に入ると、天下一品のその人らしさが現れてくる。典型的ではない。いわゆる全体主義なんていうものはダメですよ。交響樂が、みんな太鼓だつたらどうする。みんな笛だつたらどうする。いろんな音がハーモニーをなして大交響樂になる。我々の実存がそのようにして大交響樂をもつて、実存をもつて神を讃美する。いいですね。そういう在り方に徹してくださいよ。そうしたら、力がでるから。人に何と思われたって、そんなことは問題じゃない。

だから、キリストは、

「生命賭けで私の中に入つてこなかったやつは、今頃そんなことを言つたつてどう

にもならんよ、知らんよ」

と言うんだ。本当にそうだね。

「一日一生」





とは内村先生の言葉です。

「二日は千年である」

とはペテロの言葉です。

あのプロ野球の王という人も非常に努力したそうだと。しょっちゅう自分を鍛えている。みんなが大騒ぎしても、王は騒がない。彼は三振してみたり、ゴロを打ってみたり。けれども、「この球」と思った時は打つんだよね。第一球であろうと、二球であろうと、「この球」と思った時に打つのが本当の打ち方なんです。

「まあ、第一球はストライクでもはずしておけ」

なんて、そういう在り方ではダメです。一球一球に、自分が「この球」と思ったら打つ。そうしたら、必ず行くんです。その気合。球とバットと自分が一つにならなけダメです。私は今、バットを振ったら、おそらく私の中学時代よりか当たると思っている。私は野球が好きで、ピッチャーやショートをやっていたから。コントロールはいいよ。今はスピードはちよつとダメだけれども。

何を見ても、そこに何か真理がこぼれていたなら、それを身につけなくてはいかん。みんなと一緒にただ騒いでいたって、大騒ぎだけだ。

D学校にも大ピッチャーがいたんだ。内村鑑三先生の息子、内村祐之（1897～1980）。精神医学の大家です。あれが学校時代に平均点が98点。空前絶後です。一高でピッチャーをしていた。私は西片町に住んでいて、兄貴が一高だったから、連れられて、ピッチングを見に行った。今でも目に映るね。あの顔といい、姿といい、そのカーブ、ドロップの鋭さといい。慶応も早稲田も明治も五大学は全部、一高にゼロ敗してしまった。一高黄金時代という「野球界」という雑誌があったが、あの雑誌をとっておけばよかったな。家をたたんだ時にどうかなってしまった。今もその雑誌の表紙が浮かんでくる。あの内村さんは大変なピッチャーです。そういうピッチャーがいたんだよね。とにかく、何でもいいですから、打ち込んでくださいよね。また、高等学校の朝礼ではつきり言ってるかな。

## ●天国入りの路

<sup>27</sup>主人こたえて「われ汝らが何処の者なるかを知らず、悪をなす者どもよ、皆われを離れ去れ」と言わん。

「悪をなす者どもよ」

だってさ。結局、本当のことをやってないお前たち――まあ、キリストはその時、

「悪をなす」

と仰ったが――求めるものを求めていなかった者たち、体当たりしなかった者たちということですよ。

体当たりすれば、自分も驚くような世界に入ってしまったて、



「やっぱり、これは本当だった」

ということになる。いわゆる、頭でもって分かったの分らないのという、そんな世界でないということをはつきりと全存在で受けとる。そういうことから違うのを、私は

### 「異なる福音」

というところで言ったわけだ。ローマ法王を頂点としてピラミッドみたいなカトリック。職制構造をもった――「ヒアラルヒー」というんですけれども――あんな在り方いうものをキリストは夢みていたか。

要するに、

「お前たちはもう関わりがない」

と言われてしまった。

28 汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者の、神の国に居り、己らの逐い出さるるを見ば、

「あなた方はイスラエルの血統のユダヤ人だと思っている。だから天国に入れると思っても、どっこい、そうはいかんよ」

と言うんだ、キリストは。今のユダヤ人は、どうして、こういうところをはつきり読まないだろう。なぜ、ユダヤ人たちは新約聖書を読んで、

「俺たちは間違っていた」

と言わないのか。私は、何も原始福音の人たちの悪口は言いたくないけれども、あの人たちの気持の或る点は分かるけれども、ただもう直接的に彼らと結んでみても、果たしてそれが本当のことかと思う。一線を画すべきところは、はつきり一線を画さなければいかん。それは結局、キリストを、パウロを迫害し、キリストを十字架にかけた。

イエスのこの言葉は、

「今、私を本当に受けとることが、アブラハム、イサク、ヤコブおよび預言者たちの、本当に神に信じ入った人たちの、あとを本当に継ぐことなんだ」

ということをキリストは言わんとしているのに、それを受けとらないから、

「お前たちは天国に入れない」

と言われる。お前たちは天国から追いだされると。

己らの逐い出さるるを見ば、其処にて哀哭・切齒する事あらん。

「その時はもう遅いよ。いや実は、門の外で言っているのはもうその事態なんだよ。私という門があるじゃないか。なぜ、この門の中に入らなかったか」ということです。

29 また人々、東より西より南より北より来りて、神の国の宴に就くべし。30 視よ、後なる者の先になり、先なる者の後になる事あらん』

逆に今度は、東西南北からやってきて、異邦人たちが神の国の宴につく。



「異邦人たちが先に天国に入つて、お前たちユダヤ人は悔い改めない限りダメなんだ、後になってしまふぞ」

と。

「後なるものは先に」

とはそのことです。長いこと教会通いしていても、何も本当の世界に入らない。ところが、本式に受けとった人は――十年やっていてもダメなんだ、ところが――特別集會に一遍来たら、その中に入つてしまふ。これは「後なる者は先に」ということ。

「先なる者は後にならん」

という。

相対的な伝統とか、血統とか、そんなことが問題ではない。各人が神に直結する。

「各々の時代は神に直結する」

とランケが言いましたが、誰でも各人が神・キリストに直結する。これが本当の天国入りの路なんです。

「先祖にアブラハムがいたから、親父が信仰があつたから、私も入れる」

とはいかない。

「血肉にあらず」

というのがそのことです。信仰の世界は、神の国は血肉にあらず。各人がそれぞれ本当に入る。

そういうことで、「狭き門」とはキリストのことです。ところが、これは誰でもが入れらる。無条件に。こんな有難いことはない。だから、絶対恩寵です。そうしたらば、その先は、もの凄い広々とした、詩篇23篇のごときもの。そうして、何をやっても今度は、自分の与えられた狭き路を突走れば、それが天下の大道であつたということになる。いいですね。そういう気合でやってくださいよ。

そうしたらば、それは台風が目みたいなのです。台風というのは風がどこから来るのかわからない。グルグル回っているものだから。そのように、回りにもの凄い風を起こし、波紋を起こして行く。一切を動かしていく。そしてまた、周辺のものほとんどその中に取り入れられてしまふ。何を読んでも、見ても、聞いても、全部それが血となり肉となつてしまふ。そういう中心がある。中心のある人は広くなる。深い人はまた高くなる。狭い人は広くなる。こういうことなんです、福音の世界は。

どうぞ、そういうことで行きましょう。パウロが言っている焦点は、贖罪の十字架とこの永遠の生命、愛の生命をもった聖霊です。そこには、知恵も力もいろんなものが働いてくる。では、今日はこれでおしまいいたします。

